

近代中國におけるバイロン受容をめぐる

——章炳麟・魯迅・蘇曼殊の場合——

藤 井 省 三

〔一〕

義和團事件は、清末思想界に大きな影響を與えた。第一に康有爲ら立憲派の論理的破産である。彼らは清朝を推したてたことにより、アヘン戦争以來の亡國の危機を切り抜けようとしていたが、事件によりこの征服王朝の抵抗の軸となるには餘りに無能な現實が、暴露されたのである。次に、中國人民には抵抗の精神が最早存せぬ、という危機感が高まったことを擧げられよう。日本軍の天津入城に際して、民衆は「大日本順民」の旗を掲げてこれを迎えた。このような事態を革命派は「漢民族がまず滿洲に反抗し奴隸から脱脚しないかぎり、外國帝國主義に抵抗することは不可能だ」と認識した⁽¹⁾。

光復會を組織し、中國革命同盟會では理論面を擔當して、孫文・黃興と共に革命の三尊と稱された章炳麟(字は太炎)の主體性論は、この状況下で生まれたのである。彼の革命論は「今日事を成す」には情念こそが重要であり、これを個に喚起するには佛教による道德の進歩と共に「國粹」によって民族意識を揺り動かして、愛國の熱情を増す⁽²⁾べきだ、と要約できよう。個の自意識の源泉として國粹をとらえると同時に、國粹の喚起する民族愛を革命の原動力にしようというのである

近代中國におけるバイロン受容をめぐる

り、いわば方法としての國粹を梃子とした民族革命主體性論ということができる。

章炳麟の主體性論は、必然的に主體自體への問い直しを呼びおこす。問いを發した若い世代の一人に魯迅がいる。清末の澱んだ中國の縮圖ともいべき大家族の中で成長した彼は、章の如く國粹を素直に信じるには、餘りに民族の暗黒部を感じとっていた。彼が求める主體の個の原動力は、近代西歐の科學者と詩人の精神であり、その像はバイロンにおいて結晶している。

一方魯迅と同世代者の蘇曼殊は、主體を根源的に問い直す過程で、個的世界とも評すべきものを發見する。彼の新しいバイロン觀は、辛亥革命がその後中國に準備した新たな文學の誕生を告げているのである。

本稿は、章炳麟の革命思想から出發した若き魯迅と蘇曼殊が、近代文學の地平を切り開いていく過程を、バイロン受容を軸として考察せんとするものである。

〔二〕

中國に初めてバイロンを紹介したのは梁啓超である。彼は一九〇二

年雜誌〈新小説〉に〈新中國未來記〉⁽³⁾を發表した。ロシア占領下の旅順を舞臺にとつたこの小説第四章で、彼はバイロンへギリシアの島々へ第一・三兩章を譯したのち、主人公に次の如く語らせている。

バイロンは自由主義を最も愛し、それと共に文學精神においてギリシアとまるで因縁があつたかのようだ。のちにはギリシア獨立のために、なんと從軍して死んだのだ。まさに文界筆頭の大豪傑と言える。彼のこの詩は、ギリシア人を勵ますために作つたのだが、今日ぼくたちがきくと、まるで中國の爲に歌つたかのようだ。

バイロンの詩的表出は全く梁の眼中にない。「ギリシア人を勵ます爲に作つた」という言葉は、同じく〈新小説〉に發表した論文へ小説と政治の關係について⁽⁴⁾で、新社會建設、新人格形成における小説の實用性を論じた梁の面目躍如たるところである。

〈ギリシアの島々〉を梁は二章譯しただけであつたが、その全譯を完成して〈新小説〉に發表したのは馬君武である。また彼はユーゴーとバイロンを論じた〈十九世紀二大文豪〉を、梁の主宰する〈新民叢報〉(一九〇三年三月)に發表している。⁽⁵⁾その中で彼はバイロンを、ギリシア獨立戰爭に参加中病死した義侠にして文學者であつたと評している。半植民地狀態の中國を憂う梁・馬兩人にとつて、詩人バイロンは何よりもギリシアを助けた義侠であつた。單純化を恐れず、假にバイロンが詩作と政治行動によつて成した全表現を、それを表現せしめた彼の心的世界とその表現された結果としての政治性との二つに腑分けするならば、二人は壓倒的に後者に注目していたのである。自由主義といひ義侠心といひバイロンの皮相を語つてに過ぎない。例へば、西歐並びにバイロン自身における古典ギリシアの重みについて、二人は殆んど氣づいていないのである。

章炳麟の場合はどうか。彼には直接バイロンを論じた文章はなく、革命論争中二・三度觸れているだけである。その一つはインド問題をめぐる大隈重信の發言を批判した文章に表われている。當時インドでは大規模な反英闘争が展開されており、指導者ティラクは闘争勢力の結合原理として民族的共感に注目し、⁽⁷⁾ヒンズーの民族的英雄シバジ王を祭る運動をはじめていた。これは一九〇五年以來日本にも傳えられ、七年四月二十日には五十餘名の在日インド人留學生が發起人となり「清國公使を始め暹羅、比律賓の東洋人は勿論歐米紳士淑女等」多數の參會を得て、東京シバジ祭が盛大に催された。⁽⁸⁾日印協會々長であつた大隈は、その場でインド人の心を踏みにじる如き發言をした。曰く、生存競争に堪えぬ結果としてインドは亡國となり、自由寛大な優等民族英國人の下で統一されたからにはカナダの如く自治を得るよう努力すべきで、スワデシ運動の如く竹槍で鐵砲に立ち向かつても何の益もない、と。⁽⁹⁾この發言が、朝鮮を植民地とした新興帝國主義日本⁽¹⁰⁾の立場を反映していることは、當時の新聞論評を見ても明かである。

このような日本の國情が、インド人の失望と反感を買つたのは當然である。⁽¹¹⁾そしてこの時同じ被抑壓民族の一人として大隈を批難したのが章炳麟であつた。その批判は〈印度シバジ王紀念會の事を記す〉⁽¹²⁾で展開されている。その論旨は「中日兩國は文化的はインドに負うこと大であり、その關係はあたかも歐州とギリシアの如くだ。バイロンはギリシア獨立を助けたが、我々も實行できぬとしてもその心だけは失なつてはならぬ」というものである。幸徳秋水等日本社會主義直接行動派と、朝・越諸民族の獨立運動家と共に結成した亞洲和親會解體後、この民族的共感こそが更に中印兩民族の連帶を深めていったので

ある。

ところでバイロンがギリシア獨立に加わる背景には、ギリシアが西洋に對してもつ文化的意義が存在している。R・F・グレックナーは、バイロン詩の主題について樂園を喪失したこの世の地獄における人間の世界苦であると解釋し、そのギリシア觀は人類がエデンの状態に最も近づきえた傳説の國であつたと論じている。バイロンの英雄的行爲と、グレックナーの指摘する形而上的の不安から生じたギリシア憧憬との關係を、章は《ヘンバジ王會》で粗略ながらも的確に理解していた。彼は論じる。「中國日本兩國は、印度の佛教を奉じて自らの道德を高めてきた。これは丁度近代歐洲とギリシアの關係と同じである。ギリシアが亡べば、英國詩人バイロンはその獨立を助けるのだ。」梁啓超の單純なバイロン觀をはるかに抜く文化の契機を含有した有機的理解は、なぜ章において始めて可能であつたのか。それは彼が、國粹を人が民族的抵抗に立ちあがるときの原動力と自覺していたからである。つまり、民族の危機において人を行爲に驅りたてる文化Ⅱ國粹の、個に對する絶對的關係を前提としていたのである。しかし逆に個の文化へのアイデンティティを大前提とした革命論の爲に、バイロンをしてギリシアを憧憬せしめた個の世界の問題である世界苦は、章の眼には映らなかつた。H・G・シュエンクは西洋のバイロン受容について「それぞれの國民がバイロンの作品のうちでいちばんびつたりする部分を選びとつた」と述べているが、それは「それぞれの個」においても同様であらう。

二十歳の魯迅が日本に留學したのは、一九〇二年のことである。仙臺醫專入學前の混沌から同校中退後、初期思想の中核ともいえるものが形成される過程は、すでに幾度か論じられている。それを敢えて一

近代中國におけるバイロン受容をめぐって

言にまとめれば、現象である物質文明の背後に存在する精神と、それを擔ってきた主體的個のあり方を西洋から中國がいかに受容すべきか、といえよう。バイロン・シェリー及び東歐ロマン派詩人を論じた《摩羅詩力説》(一九〇八)は、こうした問題意識の下で執筆されたのである。論旨は次のように要約できよう。詩人の聲は人の心に逆らうものである故に革命の前衛たりうる。現代西歐文明の中心をなすのは十九世紀のバイロンらロマン派詩人の『新聲』であり、野蠻から文明に進みつつあるロシア・東歐も詩人の聲によって文明の基本である精神が振り起こされた。インド・エジプトなど古い文明國が亡びたのは、この詩人の聲が絶えた爲である。中國を新しく文明化して救うには、ロマン派の精神に學ぶべきだ。

この論理構造はそのまま西歐科學史を論じた《科學史教篇》(同年)に移し變えうる。詩人と社會は、科學者と社會の關係に置換でき、神への反抗を唱うバイロンは、近代科學の基礎を築いたベーコン・デカルトに、祖國解放の爲に詩と命を捧げるミッキエヴィチ・ペテーフイラの詩人は、フランス大革命の科學者モンジェにそれぞれ對應するものである。《摩羅詩力説》とは《科學史教篇》が科學論であると同じ意味合においてのみ「文學論」たりうるにすぎない。《文化偏至論》等一連の論文と同様それはあくまでも、没主體的改良論革命論への反駁としてかかれたのである。

魯迅に遅れること三年、一八八四年九月に、蘇曼殊は横濱の茶商人蘇傑生の子として生まれた。生母は父の日本人妾河合仙の妹お若であったが、仙を母として育てられたという。詳しい傳記は他書に譲るが、本稿では一九〇二年留日學生の革命團體青年會に加わった頃の彼の詩・論文の特徴について、一・二觸れておきたい。《詩と畫》によって湯

國頼に留別する(24) (一九〇三)二首が愛國的ヒロイズムに満ちている一方、(嗚呼、廣東人)は、故郷の廣東人の多數が買辦となつて帝國主義に兄弟を賣ると批判すると共に、翻譯小説(慘社會)(ユゴー原作へレ・ミゼラブル)は金錢欲の固まりとして中國人を嫌惡している。母國への矛盾した感情は、翌年康有爲暗殺が頓挫したのち、シャム・セイロンに南游し梵文に没頭していくことも關係が深いと考えられる。

章炳麟との親交は、曼殊が一九〇七年に來日した折、民報社で章と同居したことに始まっている。そしてインド文明への憧憬が、十六も歳の差がある二人を固く結びつけたのである。但し章が主に佛敎に關心を抱き、それを己の思想的糧としていたのに對して、曼殊は極めて文學的にインドに傾倒していた。七年には陳獨秀が買與えたマックス・ミュラー等の書を下敷として(梵文典)を著し、九年には章が主催したと思われる「梵學會」の講師ミストラと、カーリダーサー(雲の使い)共譯を試みている。また(シャクンタラー)にも興味を示し反譯を幾度も計畫していた。

一九〇四年、革命に挺身する志が頓挫したのち、梵文の世界に没頭していた曼殊が、再び革命運動に回歸するには、章の影響力が大いに與かっていると思われる。曼殊が(民報)八年四月號に發表した(嶺海幽光錄)は、明末中國人の清朝に對する凄慘な抵抗をオムニバス形式で描いたものである。これは章の説く方法としての國粹の實踐であった。曼殊の梵文に關する學識は、中印民族主義の國際連帶において發揮される。先に彼は東京シバジ祭の爲に來日したブラダに(江干蕭寺圖)一幅を贈別しており、八年七月には(民報)に梵語に關する譯注多數を含む(婆羅海濱遯跡記)を發表している。これは神話的世

界を舞臺にして反英鬪争を描いた小説であるが、その原作者は、當時テイクと並ぶ指導者であつたオーロピンド・ゴーシュと推定される。(25) (ベンデ・マタラム(母國萬歲))は、B・チャテルジーの反ムガール鬪争を描いた小説中の詩であるが、ベンガル鬪争中にゴーシュによつて革命歌として取上げられインド中で唱われた。この詩の英譯を、曼殊はまた自らの譯詩集(潮音)に收めている。このように彼が現實のインド鬪争と關わりを持つようになった背後にも、「亞洲和親の局」における梵語の重要性を強調した章の革命理論が存在しているのである。

章に鼓舞されたこともあつてか、曼殊は一九〇八年正月にはマックス・ミュラーの弟子南條文雄(26)を頼つて眞宗大學(現大谷大學)に入學して梵文研究に専念するつもりであつた。しかし四月に南條が京都本願寺に移つてしまい、「人事は定め難く、濁世は亂れるこのとき」に「心中の無念」を噛みしめねばならない。彼がバイロンを耽讀し始めたのはこの頃であつた。

最初の譯詩集(文學因縁)の廣告は、(天義)一九〇八年一月號に載っている。ゲーテ(シャクンタラー)に題して(27)等に混つて、バイロンは章炳麟の高弟黃侃の譯詩(Maid of Athens, Ere We Part)と、曼殊譯(The Island)の一節が收められているのみである。(文學因縁)自序は、梁馬兩人の譯業を例にとり反譯の難しさを述べるに際して、僅かにバイロンに觸れているだけである。但し母國の衰亡と文學との關わりを「現在中國は末世にして麻の如く亂れており、文事も衰えて久しい。大漢の天聲は眞に絶えてしまったのか。」と述べている點に注目したい。天聲絶えなんとする母國を憂う心情は、同年九月に出版された(拜輪詩選自序)に至つて明確にバイロンにおいて像を結

ぶ。ベルリン大學教授フランケの依頼をうけて探した《法苑珠林》(唐代に編集された佛敎書)の版本は、すでに虫に食われており、原本が手に入らない。曼殊は歎く。

中國はすべてにおいて衰亡し、もはや昔時「天國」(Celestial Empire)と稱された面影はどこにも見當たらぬ。インド・バビロン・エジプト・ギリシアに續いて亡國となるのだらうか。わたしはこれに思うにつけ深い恫^{おそ}みを覺えた。最近南京より急ぎ母に仕えようとして歸ったが胸を患い、筆を執つてバイロンの《去國行》《大海》《哀希臘》の三篇を譯した。ああバイロンは素晴らしい! 詩人の去國の憂いを詠い、他國を助け、その獨立が果たされた時には已にこの世を去つていた。バイロンの名は、日月の如く光輝いてゐる。

失なわれた「天聲」、亡國、バイロンのギリシアでの死——序文という性格上飛躍が大きい、その溝を埋めていくと、わたしたちには已になじみの《摩羅詩力說》の詩人像が現われてくるのである。

一九〇七年夏、魯迅は雑誌《新生》の發行を計畫していた。後年彼が増田涉に語つたところによれば、曼殊も同人の一人であつたといふ。蘇曼殊譯案《慘社會》を愛讀していた魯迅が民報社に居た彼に聲をかけても不思議はあるまい。共通の友人陶成章が二人を引合させたのかも知れない。《吶喊》自序で魯迅は《新生》流産の經過を「出版の期限が近づくと、眞先に原稿を擔當する數名の者が雲隠れしてしまひ、續いて出資者が逃げだし」たと述べている。曼殊は同年九月に上海に渡つており、おそらく「雲隠れした」書き手の一人であつたのだらう。魯迅はまた留日時代を回顧した《雜憶》をかいてゐる。ギリシア獨立戰爭に赴くバイロンに感激した思いに續けて次のように述べ

てゐる。

惜しいことに私は英語を解さぬので、みな譯本で讀んだ。——中略——蘇曼殊氏も數首譯してゐる。そのころ彼は《筆を彈く人に寄す》式の詩をかいていなかった、まだバイロンに「つながらんところがあった。譯文は大變古めかしかったが、章太炎先生が潤色した爲かもしれない。そんな譯で全く古詩のようであり、あまり廣く讀まれない。のちに彼が自ら發行した縁の地に金文字の題が入つた《文學因緣》に收められた。

魯迅は幾つが記憶違ひをしてゐるが、ともかくもこれは曼殊が己と相似したバイロン觀を抱いてゐたと、當時彼が認めていたことを示すものである。

《拜輪詩選》出版の半年前、丁度曼殊がバイロンを耽讀し始めた直後に《摩羅詩力說》は《河南》に發表されてゐる。前年に《新生》編集會議の席上、魯迅のバイロン論をきいてゐたとすれば、曼殊はこれを興味深く讀んだことだらう。當時、周作人の筆による《摩羅詩力說》に類似した諸篇が、劉師培夫妻の編集する《天義》に掲載されてゐたことはのちに述べるが、その周作人によれば《摩羅詩力說》が發表された《河南》も劉の編集によるものであつたといふ。劉は《梵文典》に章炳麟と共に序を寄せており、アナキストであつた妻何震は曼殊を敬愛するあまり《曼殊畫譜》出版を企て、曼殊の母と章の序に續けて自らの後序を《天義》七年九月號に發表してゐる。このような親友の編集する雑誌にバイロン等を扱つた力作論文が掲載されたのであれば、讀まぬ方が不思議であらう。

《拜輪詩選》自序は《去國行》(My Native Land—Good Night)を「去國の憂いを詠」つたものとしてゐるが、この解釋はおそらく

レックナーが「生來の國土と暮らしを、『わが母なる大地』を、友と戀人を喪失」したと評するところのバイロンの心情と共通するものであろう。曼殊にとつて、バイロンの「樂園の廢墟」とは、詩人の聲が絶え亡國に瀕した中國であつた。

ところでここでは、一旦魯迅と同質のバイロン觀を有した蘇曼殊が、更に獨自の理解を抱く點に注目したい。譯文集〈潮音〉(一九一一年發行)は、バイロンとシェリーを論じた英文自序を収めている。本來これは九年頃に計畫していた〈拜輪詩選〉再版の爲に書かれたものと思われ。魯迅は二人を共に世俗に反抗し自由を求めた同質の詩人と考へた。二人の作品の主題は神の絶對性を否定し、壓制に反抗する熱情であると彼は論じている。一方蘇曼殊は「詩的表現の主題に創造的な氣高い情念、即ち愛を抱いていた」二詩人の同質性を認めたと上で、更に「表現の様式」において二人が全く正反對であつたことを指摘している。バイロンが熱烈な自由主義者として、社會・政治のあらゆる場において自由を主張したのに對して、シェリーは詩的精神が強烈な爆發的表現となつて現われることはなく、靜水に映る月のような表現であつた。「シェリーは愛に涅槃を求めたが、バイロンは愛の爲のそして愛における行動を求めた。」

〈摩羅詩力說〉と〈潮音〉英文自序の差は、單に二詩人を同質とみるか否かではない。またシェリーを反抗し動の詩人バイロンに近づけて理解するか、或るいは愛の哲學家し靜の詩人として別に置くかというだけの對立でもない。問題は、自由と反抗というバイロン精神を、魯迅がそれ自體としてとり出してきたのに反して、蘇曼殊はその詩的表出の契機として個の内的世界に存在する「創作における崇高な感情——愛」の理解に達していたという點にあるのだ。蘇曼殊の詩人論

は、已に行爲における主體性の源という觀點から個の情念を捉えてはいない。彼において個の情念は革命の方法として求められているのではなく、一個の完結した世界、詩人の生を決定する原點として存在しているのである。

〔三〕

中國のバイロン受容に際しては、當時〈太陽〉〈明星〉〈文藝界〉等でその紹介をしていた木村鷹太郎が影響を與えていると思われ。日本主義を掲げて明治二十年代に高山樗牛らと共に活躍していた木村のバイロン觀は、〈太陽〉明治二十八年九月號に發表した〈詩人バイロンの海賊、及び「サタン」主義〉によく表われている。「劍力は權利なり、劍光閃くの下、善惡何の區別があらん、權利義務亦何ぞ頼むに足らん。人常に自由と呼び權利と叫ぶと雖、彼等は未自由を知らず、又權利を悟らざるなり」と絶對自由、權力への意志を謳歌する木村は、詩人の内的契機への洞察に缺けており、のちに美的生活論争を起す樗牛が〈太陽〉同號文藝欄で、バイロン流行を悪影響として批難したのは、この點にも關わつているのであろう。梁啓超・馬君武兩人のバイロン觀は、木村の解釋から權力への意志を削り、さしあつて中國が必要とする自由主義のところを頂戴してきたものである。

この二人に比べて、章炳麟は己の、方法としての國粹に照らすことによつて、バイロンにおけるギリシア憧憬と獨立戰爭參加との關係を遙かに鋭く理解していたことは已に述べた。このバイロン觀の構造から、その大前提である國粹の契機が脱落したとき、魯迅の詩人論が生まれた。彼の國粹に對する不信感、章と對照的なインド觀に反映されている。

仙臺から歸京後、魯迅は以前より尊敬していた章の元に通い國學を學んだ。後年彼は自らの死を目前にしつつ二つの追悼文を綴つて「學問のある革命家」への敬慕の念を披瀝している。若き魯迅の章に對する傾倒ぶりは、章の編集する「民報」を愛讀するあまり文體まで影響されたという回顧をみても想像できよう。そして魯迅の一九〇七・八年の論文には、昇官發財主義への批判、佛敎への好意的評價、アナキストへの批判等、章と共通する論旨が多く見られる。しかしインド觀は決定的に異なっていた。章はインドをアジア文明の源と考え、ティラクラの國粹主義に共感し連帶した。まさに「インドへの親近感、それはそのまま、かれの思想的原點の表白であつた。」

これに反して、魯迅は留日當初から一貫して否定的インド觀を抱いている。〈中國地質略論〉(一九〇三)で、一國の文明の尺度とも言うべき地圖がその宗主國の首都ロンドンの書店に並んでいる亡國インドに言及して以來、文化的發展の已に止んだ「古國」として常にインドを見ている。〈摩羅詩力說〉ではポーランドと並べてインドを「古國・亡國・闇の國」と呼び、〈科學史教篇〉では「昔事を尊ぶあまり、このように自らを欺くことを平氣とするようになる」古國の例として、インドに英國人が水道を敷設したときの逸話を引いている。

ベンガル分割反對闘争は當時高揚期を迎えており、本國のみならず歐米でも亡命家が多數の新聞雜誌を發行していた。このインドの革命的狀況を在日中國人に傳えていたのは、なにも「民報」ばかりではない。アナキストの劉師培・何震夫妻が東京で發行していた「天義」も、この闘争を精力的に紹介している。シバジ祭大隈發言と日本の帝國主義化を批判した劉の力作論文「亞洲現勢論」も、七年一月號に掲載されていた。魯迅は「天義」を必ず読んでいたはずである。弟周

近代中國におけるパイロン受容をめぐる

作人は「獨應」の筆名で「天義」四號(七年七月)に「婦女選舉權問題」を投稿した。「天義」社側もこの「大作に感銘」して、四・五兩號に住所を知らせよという獨應宛の廣告を載せている。覆刻版「天義」には缺號が多く、その後も寄せられた周作人論文の全貌を掴むことは不可能だが、殘存する八・九・一〇合併號、一一・一二合併號掲載の諸論文には、〈摩羅詩力說〉と共通する詩人達が登場し、侵略主義を内に含む「獸性の愛國」を戒めるなど、その主題も多く一致する。〈讀書雜誌拾遺〉という論文は、ペターフィ・ミッキエヴィチ、ブランデスに言及しているが、その(一)ではパイロンを論じたのかもしれない。魯迅が八年に發表した一連の論文は、〈新生〉のために用意されたのだが、〈新生〉が流産した七年夏以後には、周作人が「天義」に〈摩羅詩力說〉の材料を小出しに發表していたのである。文學論執筆にあたって最大の協力者であつた弟の類似論文を掲載する「天義」を、どうして魯迅が目を通さぬことがあるうか。

一九〇七年春以後、「民報」〈天義〉に氾濫するインド情報に圍まれながら、魯迅は頑なに「聲なき亡國」というインド觀を手放さなかつた。しかも東歐の亡國に對して抱いた共感をインドに寄せることなく、ひたすらマイナス例としてのみ見ている。これは、章炳麟とティラク派を心から連帶せしめた革命の方法——國粹民族主義に魯迅が共感できなかったことの傍證といえよう。

外國人に處刑される中國人、そして彼と同様に無力な表情の中國人觀衆。この場面に送られる外國人の喝采の中で、この光景を見つめる一人の中國人——「幻灯事件」とは仙臺行以前に魯迅が抱いていた、民族へのひたむきな思い入れの崩壊を象徴しているのではあるまいか。伊東照雄は、章炳麟が歐米思想の内在的批判を缺く中華主義者で

あつた爲に無内容なアナクロニズムに陥つたのに反して、魯迅が自己批判の契機として歐米文化をとり入れた點を兩者の思想的差異として指摘している。しかし、二人の差は内在的の云々にあるのではなく、むしろ民族と國粹を信じえたか否かにあるのではないだろうか。〈民報〉時代の章は、一連の論文において進化論を中心とする舶來の公理主義と血みどろの「對決」をしていたのである。後年彼の國粹論が「無内容化・アナクロ化」したのは、辛亥革命後の狀況が最早個を無條件に民族に包含させる樂觀論を許容しなかつた爲なのである。

章のバイロン理解の支柱である國粹の契機を失つた魯迅において、木村鷹太郎の説に乗じた梁啓超らのバイロン觀に後退することも許されなかつた。現在、雜誌〈野草〉に〈摩羅詩力說材源考ノ一ト〉を連載中の北岡正子は、この論文を「民族主義」を以て出發した魯迅のそれからの文學に血肉を賦した」と位置づけている。〈摩羅詩力說〉と辛亥革命後の魯迅文學とを直結する北岡氏の見解は、直ちに反論を呼んだ。北岡氏〈材源考〉の遺漏を補つて中島長文は〈藍本「摩羅詩力」の說「第四・五章」を編輯し、魯迅のバイロン論の七割が、木村鷹太郎〈文界之大魔王〉に據つてゐることを明らかにした。これは先に木村が〈太陽〉〈明星〉等に發表した論文に加筆して明治三十五年に出版した書である。中島氏は輯者引言で、バイロンの詩劇〈カイン〉を論じるとき、魯迅は「苦惱しつつ不毛の地をさまよう」カインではなく、「壓制と反抗と、兼ぬるに一人を以つて」する惡魔に共感している點を指摘している。そしてこのような魯迅のバイロン觀は「はるかにわが鷹太郎氏のそれに近い」と斷言し、「魯迅はここでキリスト教的神への反逆を書いているのだが、かれ自身が生きていた社會の支配觀念たる孔教の綱常倫理への反逆を身をもって書くことになるま

ではやはり十年に近い歲月、かれ自身の成長(?)と時代の轉換とを要したのである」と總括している。

北岡氏〈材源考〉が魯迅バイロン論の材源を十九世紀の批評家ブランダスの著〈一九世紀文藝思潮〉に求めようとしたのに對して、中島氏は材源は木村に據つており、論旨も木村に近いと證明した譯である。確かに〈摩羅詩力說〉は、その後の魯迅の文學論たるには、個的契機を缺いている。しかし、果して「反逆を身をもって書」いたものが、この書には皆無なのだろうか。魯迅に權力への意志の象徴である惡魔を教えたのは、中島氏の指摘通り木村であるが、木村とてカインの人としての苦惱を全く看過していた譯ではない。「偶然に人生を裏けて世間無限の苦痛を受」ける「人生の空なること」を彼は強調しているが、この箇所はまるで魯迅の眼中になかつた。〈文界之大魔王〉は〈摩羅詩力說〉バイロン部分の七割をカバーする種本であるが、魯迅なりの取捨選擇は當然行なわれていたのである。バイロンの死を木村は次のように描いている。

嗚呼ドン、ファンたり、又たサルダナパルスたりしバイロン、今や異郷の軍中に死す。優しき女子の、傍に在りて看護するものなく、涙を流すものもなしと雖、偉大なる心情を有せる憂國の志士は、眞卒、純潔なる熱涙を流したり。彼の周圍には或は英語、或は佛語、或はイタリア語、或はグレンシア語を語る人々のみにして、互に言語通ぜず、たゞ眼と眼とを見合せて悲哀の情を語るあるのみ。バイロン死せり。ミンロンギの人民の悲哀は直に歐洲に擴まりたり。

回顧すれば曩にバイロンのグレンシアに来るや、威風堂々、赫々たる英名は其身邊に光輝を放ち、一度其強力なる天才の觸るゝに於て

は、成功必ず可しと信ぜられしに、凡て皆な一夜の夢と消え去りたり。

このような英雄観には、「ミンロンギ、熱病の猖獗する濕地、惧れて涙を流す召使いの圍む臨終の床、死の瞬間に轟く雷鳴——あの最後の場面に出席うと苛立ちと當惑を伴う失望」を我々も感じざるを得ない。魯迅は木村の通俗的描寫をすべて省き、最後の一段を採ったのみである。

今にして昔をふり返ってみれば、バイロンは無限の才能によってギリシアを古代の榮譽に歸らせることができ、自ら腕を振って一聲呼びかければ、人は必ずこれに向かつてさっとなびくだろう、という大望を抱いてやって來たのだ。

この文章にわたしたちが魯迅の感じとっていた英雄の孤獨を垣間見る思いがするのは、十五年後の〈呐喊〉自序で、〈新生〉流産にふれて彼が再び「つまり私は、腕を一振りして呼びかければ應じる者が雲集する英雄では決してないのだ」と述べている爲ばかりではない。詩劇〈カイン〉において權力への意志としての惡魔を見出したのは木村であり、また魯迅もこの惡魔に最も曳かれたのであるが、魯迅の惡魔像は全く異質なものを含んでいる。彼は惡魔を次のように描いた。この箇所は中島氏の藍本との對照表をみても明らかのように、〈文界之大魔王〉には存在せぬ、全く魯迅自身の見解であると思われる。

上に對しては力によって神に抗い、下に對してはやはり力によって民衆を壓制する——これよりも矛盾した行爲はない。しかし、民衆を壓制するのは抵抗の爲なのだ。もし民衆が共に抵抗するならば、どうしてこれを壓制する必要があるか。

ブランドスは、「惡魔」の表現するものを一八二二年の歐洲において

近代中國におけるバイロン受容をめぐって

絶望した自由主義者の抱いた陰慘な謀略の情念であると考えている。彼はこの現實味を帯びた惡魔像よりも、カインの人としての苦惱に詩劇の主題を見ているのだが、ナポレオン後の歐洲から時代も世界も遠く離れた魯迅は、この「陰慘な謀略の情念」をより抽象的にとらえることにより、惡魔像に彼自身の感慨を託したのである。上に對しては反抗、下に對しては壓制——民衆に對して二律背反の關係にある惡魔像は、ロマン派詩人を總括する最終章の次の件りにも投影されている。

(詩人達は)その爲その一生も酷似しており、ほとんどが武器を執って血を流している。丁度劍闘士が觀衆の面前でぐるぐると立回し、戦慄と快感を與えてその死闘を見物させているようなものである。それ故群衆の面前で血が流れないのは、その人々にとって禍である。たとえ劍闘士がいても、群衆がこれを正視せず、あるいは進んで彼を殺してしまうのであれば、人々にとっていよいよ禍となり救いがたいものとなるのである。

喚聲の中で、ときには目もくれぬ群衆の中で死闘せねばならぬ劍闘士——詩人の生とは魯迅にとってかくも孤獨なものであった。バイロン臨終の場面に戻って論じれば、木村が不運な英雄の死とそれを歎く人々という、詩人と群衆の調和した通俗的關係を書いているのに反して、魯迅は抵抗と壓制に破れて死んでいく孤獨な詩人の姿を描いていたのである。

先にふれたように章炳麟の革命理論——方法としての國粹とは、個的主體性の原動力を國粹が個の情念に對してもつ魔力に求めるものであった。彼は清末革命思想を民族と個の二極に止揚し、この兩極を主體性とこれを喚起すべき國粹で繋いだのである。しかし國粹を信じえ

ぬ魯迅は、この構圖をそのまま繼承することはできなかった。留日當初、彼は親友と三つの相關する問題について幾度も話合つたという。

「一、最も理想的人間性とは何か。二、中國の國民性に最も缺けてゐるのは何か。三、その病根は何か。」個の質としての人間性を根源的に問おうとするとき、國民性を負なるものとして捉えていた魯迅には、章の方法としての國粹に共感することは不可能であつた。「最も缺けてゐるのは何か」という設問は、その間の事情をよく示してゐる。

個に對して先驗的に存在する國粹という章の思想的枠組に對して、魯迅は、反抗によつて民族の精神を呼び醒ます詩人の聲という、文學のより根源的な役割を導入することにより、民族と個の位置を逆轉させたのである。章の文化Ⅱ國粹論的バイロン像のあとでは、個の情念と民族の關係が不分明な梁啓超流の英雄像や、木村鷹太郎の輕薄な惡魔像を、最早魯迅は受け入れることはできない。彼は木村バイロンを承けて、カインではなく惡魔に注目した。しかしそれは清末革命思想史の展開を踏まえて考える時、中島氏の如く「アジアがまだ歐米帝國主義勢力と西洋文明に對してまだ共通の基盤を失つていなかった時代の、文學へのやや遅れての反映」と結論することはできない。魯迅が描く、民衆の解放の爲に叫ぶのにもかわらず當の民衆に拒絶されて連帶できぬ惡魔Ⅱ詩人の孤獨とは、國粹除去によつて自立した個の内發性がそれ自身を生み出すべき個的契機を未だ缺いているが爲に生じたものなのである。新たに魯迅が獲得した個の民族に對する内發的主體性は、個が民族と關わることの個における意味——何故人は民族に對して新聲を喚ぶのか——己の行爲の始源を問うてくる。しかし、人間に恐れられつゝも彼らの奴隸状態を見て黙しておられぬ惡魔

の位置に、敢えて立とうとするのは何故か、〈摩羅詩力説〉は何も語っていない。民族とのアイデンティティを失つた孤獨な個が、敢えて再び民族と關わりとうとする契機を缺落したままなのである。

一九〇八年の一連の論文の最後を飾る〈破惡聲論〉は、新たな主體性論をひっさげた若き魯迅が、章炳麟と論争をしていた保皇派・アナキストに切り込んだ文章である。「惡聲」を破りえたものの、彼の新たな主體性論は展開されぬまま、〈河南〉の休刊と共に未完で放置された。^{補注2}

若き日の魯迅が到達した内發的主體性論は、それが生起する個的世界の存在を豫言している。廿世紀初頭の中國において、この問題に逸速く光をあてたのが蘇曼殊であつた。皮肉なことに、章炳麟の思想的枠組を逆轉させた魯迅よりも、曼殊は遙かに章と親しい關係にあつた。だが、彼にとつて國粹はアイデンティティの對象、即ち美的世界として存在していた。清末という時代が、自己存在の證を求めめる曼殊の苦惱を革命という大状況と結びつけたのである。衰亡した民族、それを救済せんとする主體的個、方法としての國粹——章の描いたこの革命理論の構圖をはみ出す形で、曼殊には原點として存在の不安があつた。彼においても、章の描いた民族と個の位置關係は逆轉してゐるのである。日中混血という彼の身上と時代状況が、相互に増幅作用していたのであろう。魯迅〈摩羅詩力説〉を踏臺として、逆轉した方法としての國粹から内發的主體性を腑分けした曼殊は、〈潮音〉英文自序において、それ自體で完結し己の生のあり方をも決定する個的世界の存在を提示した。この世界を貫く論理として彼が擱んだものが「創作における崇高な感情——愛」であつた。

蘇曼殊の個的世界が作品として完結するには、なお辛亥革命を俟た

ねばならない。一九二二年革命の報をジャワで受け、急ぎ歸國した彼が見たものは、無残な「革命」の正體であった。革命後醜い利権争いが續いていた上海では、以前出家して時折僧服を着けていた曼殊が、還俗して某黨某會に入ったという噂まで流れていた。その上、畏敬していた友人章炳麟は、革命を横取りした袁世凱の幕下に入ろうとしていたのである。一二年上海發の書簡で、彼は章炳麟を「太炎」と字で呼び捨てて訪問することを拒絶し、革命を見ずして病死した趙伯先の墓前で自筆の畫を燒いて供養としたいと述べている。章の主觀はどうであれ、袁世凱の幕下に入るかつての革命家は、曼殊の眼にはさだめし醜く映ったことだろう。生きて袁の幕客となる章を訪れず、死んだ志士の墓に畫を捧げて筆を斷つ——この曼殊の言葉は、挫折した革命への挽歌であった。

このころ著わした小説が《斷鴻零雁記》である。これはユング心理學のいうところのアニマを求めて、海陸によつて象徴される聖と俗の世界を彷徨する少年を描いた幻想物語である。《拜輪詩選》自序、《娑羅海濱逐跡記》等で必ず亡國を憂える表現として使用されていた「恫み」という言葉が、この小説で始めて「身世言い難きの恫み」という句となつて彼の個的世界に存在する悲劇の表現に轉じている。

米國の文藝批評家E・ウィルソンは、象徴主義をロマン主義の産物であると位置づけた上で次のように兩者を比べている。

ロマン派が、その個人主義の立場から、すわりごちの悪い社會というものに反抗あるいは挑戦するのが通例であつたのに對して、象徴派は社會から距離をおき、社會に對する無關心を養う。象徴派はその獨自の個人的感性を、ロマン派が練磨した點以上に練磨するであろうが、その個人的意志を主張したりはしないだろう。象徴派

は、終局的には——中略——文學の領域を、客觀的なものから主觀的なものへ、社會とともにする經驗から孤獨においてかみしめられるべき經驗へと、完全に一變させるであろう。

廿世紀初頭の西歐では、象徴主義・世紀末文學が開花して久しかった。近代中國において「文學の領域を主觀的なものへ、孤獨においてかみしめられるべき經驗へと」變えたのは、辛亥後の蘇曼殊であつた。しかし、魯迅に「バイロンにつながるころ」がなくなつたと評された蘇曼殊は、さりとて西歐の象徴主義者の如く、個的世界に安住することもできなかった。後に、劉半農は曼殊との上海での對面を追憶した詩の中で次のような彼の言葉を記している。「半農君、こんな時に君は未だ詩だの學問だのと言っているのか!」こんな時とは、袁世凱の横暴によつて混沌の度をいよいよ増す中國革命を指していたのであろう。一九一八年五月、病弱の身を顧みぬ奇行と漂泊の末、蘇曼殊は上海フランス租界の病院で没する。享年三十五。その死は、しばしば漸進的自殺であつたと指摘されている。

これと時を同じくして魯迅は《摩羅詩力説》以來の課題に、一つの解を出すべく《新青年》に《狂人日記》を發表している。象徴主義の世界に沈んでいった蘇曼殊の死と、《狂人日記》の出現は、その後の近代中國文學の行方を暗示しているかのである。但し《狂人日記》に至る爲には、魯迅は《域外小說集》アンドレエフ翻譯に象徴される「社會生活から孤立した私的想像力の世界」に一度身を沈めねばならなかつたのである。

注(1) 近藤邦康《辛亥革命》紀伊國屋書店、一九七二。

(2) 章炳麟の生涯、思想のうち本稿ではテーマに關わる最少限のものに觸れるにとどめ、全般については次の諸文獻に譲る。近藤邦康《章炳麟に

- おける革命思想の形成」東洋文化研究所紀要、第二八冊、一九七二。小野川秀美「清末政治思想研究」東洋史研究會、一九六〇。
- (3) 「飲水室合集」中華書局、一九三二、專集之八九所收。
- (4) 注(3)と同じ。文集第四冊所收。
- (5) 胡適「去國集」(「嘗試集」亞東圖書館、一九二〇、所收)は「新文學」としているが、「新小説」の誤りと思われる。
- (6) 馬はのちには「民報」派となるが、この時期には梁とも交流があったものらしい。
- (7) 小谷汪之「アジア近現代史における民族と民主主義」。「歴史學研究」別冊特集、一九七二・一一に收録。
- (8) 一七世紀西インドで、牛と國土の保護を標語としてムガル帝國に抵抗したマラータの王。
- (9) 「東京朝日新聞」明治四〇年四月二二日「大隈伯と印度人」。
- (10) 注(9)と同じ。「大隈伯演説集」(一九〇七年)等にも講演記録が收められている。
- (11) 「東京日日新聞」明治四〇年四月二〇日「大隈伯のインド觀」。
- (12) V. Chitrol (India Unrest) McMillan & Co. 1910.
- (13) 「民報」七年五月號章炳麟の記事「印度シバシ王紀念會の事を記す」印度人プラダン・ボース兩君を送る序」によると、紀念會に先立って二人のインド人が民報社を訪れ、章らを招待したという。プラダンは、ロンドン「インディア・ハウス」を設立したインド人革命家シャマジ(Shamaji Krishna Verma)の奨學制度によって歐米に留學していた人物で、日本にはその歸途に寄ったものと思われる。(The Japan Adv. vertizen) 四月二二日號は「ある著名なインド人紳士が設立した奨學制度によって留學した」と述べている。シャマジについては Yajnik (Shamaji Krishna Verma) Lakshmi Publications, Bombay 1960 を参照した。彼が橋渡しをしたのか、シャマジがロンドンで發行していた
- 新聞「Indian Sociologist」の論文は、その後幾度も「民報」に譯載される。當時シャマジに倣って東京青山にインディア・ハウスを設立する一方、(A. C. Bose (Indian Revolutionaries Abroad, 1905-1922) Bharati Bhawan, Patna, 1971.) 幸徳秋水・大杉榮・山川均らと交流し、直接行動派社會主義者の組織する「金曜講演會」で演説をしていた人物がいた。もう一名のボースとは、このスレンドラモハン・ボースのことであろうか。
- (14) 注(13)を見よ。
- (15) 「Byron & the Ruins of Paradise」The Johns Hopkins Press, 1967.
- (16) 「ロマン主義の精神」生松敬三、塚本明子譯、みすず書房、一七九五。
- (17) 丸山昇「魯迅」平凡社、一九六五。伊東昭雄「魯迅「科學史教篇」譯文、譯註ならびに解題」(一)「日本大學文理學部研究年報」一五、一七號。伊藤虎丸「魯迅と終末論」龍溪書舎、一九七五。今村與志雄「魯迅と傳統」勁草書房、一九六七。
- (18) (19) (20) 「魯迅全集」人民文學出版社一九五六一五八、「墳」所收。以下魯迅の著作は、同全集篇名による。
- (21) 傳記は Liu Wu-chi (柳無忌) (Su Man-shu) (Twayne Publication, N. Y., 1972)・飯塚朗譯「斷鴻零雁記」(平凡社、一九七二)に詳しい。
- (22) 蘇曼殊の作品は、文公直編「曼殊大師全集」(香港文淵書店、一九五五)による。
- (23) 一九〇九年四月劉三宛書信。なお章炳麟が梵語講習會を開いて、魯迅・周作人兄弟に案内状を送ったことは、周作人「記太炎先生學梵文事」(「乘燭談」上海北新書局、一九三〇、實用書局一九七二年重印)に詳しく。
- (24) 「天義」四號グラビア。

(25) 《民報》二二號には、「南印度 Ghocha 著」二三號には「南印度聖沙著」とある。オーロビンド・ゴシヤの存在は中國革命派にもよく知られていたとみえて、章炳麟も彼に言及している(《民報》一七號)。なお一九七二年に發行された全三〇卷の全集《Sri Aurobindo Birth Centenary Library》(Sri Aurobindo Ashram Trust Pondicherry, 1972)には収録されてゐない。

(26) 章炳麟《蘇子殿に與える書》《甲寅雜誌》民國四年八月號。

(27) 南條は英國に留學して M・ミューラーに師事した。當地では清末佛教改革家楊仁山とも親しくしていた(H. Welch《The Buddhist revival in China》Harvard Univ. Press 1968)。なお曼殊は M・ミューラーの著《梵文典》の下敷としており、一九〇八年には楊の開いた佛僧學校祇桓精舎で英語を教えている(注(20)を参照)。

(28) 《南條先生遺芳》大谷大學。昭和一七年。

(29) これは、曼殊が半年後《民報》に發表した《沙羅海濱遯跡記》冒頭に引用されている。恐らく譯業の過程でめぐり會つたこの詩を、先に譯詩集に収めたものと思われる。

(30) 同書には英國の外交官であり、中國學者でもあつた W・J・B・フレッチャーの英文序(日付は一九〇七・一〇・六)と曼殊の漢文自序がある。自序に「去秋ベルリン大學教授フランケ居士は南京に立寄り、祇桓精舎で私に會われた」と記されている。曼殊が楊仁山に請われ、佛僧學校祇桓精舎で英語講師を勤めていたのが、八年秋であるため、柳無忌は自序の執筆時期を九年九月前後としている(前掲《Su Man-Shu》)。また日付が「光緒三十二年(一九〇六)佛が勿利天より天下に還る日」とあるため、文公直は六年説を主張している(前掲《曼殊大師全集》)。自序が《潮音》に再録されたとき、この日付の「光緒三十二年」は戊申(一九〇八年)に改められているので、六年説は誤りである。また國會圖書館の所蔵する《拜輪詩選》の奥付には「戊申九月十五日初版發行」とある。

近代中國におけるバイロン受容をめぐって

るので、この曼殊自序も八年九月には執筆されていたと考えるのが妥當であろう。

(31) 増田渉《魯迅の印象》講談社、一九四八。

(32) 周啓明《魯迅的青年時代》中國青年出版社、一九五七。なお周啓明とは周作人の筆名。

(33) 《墳》所収。

(34) 《筆を彈く人に寄せる》とは《筆を調べる人の繪に》《筆を調べる人に寄せる》という二つの詩題を混同したものであり、《文學因縁》はバイロン詩を二首収めているのみで、むしろ《拜輪詩選》を擧げるべきだろう。曼殊譯詩は結構讀まれたと見えて、張定璜、馮至、郁達夫らは後年高い評價を與えており、國會圖書館所蔵の《拜輪詩選》奥付によれば、一九一四年までに三度版を重ねている。

(35) 《知堂回想錄》第八章、愛育圖書文具公司、一九七〇。

(36) 《國粹學報》一九〇八年七月號。

(37) (38) 注(3)と同じ。

(39) 柳無忌は、曼殊はこれを《拜輪詩選》の序にするつもりであつたが、本の印刷準備が完了した一九〇九年一〇月に、フレッチャーより英文序を受け取つたため同じ分量の英文自序を抜き、代わりにフレッチャー序を入れ、自序は《潮音》出版の際に復活した、と推定している(前掲《Su Man-Shu》)。《拜輪詩選》が八年九月に出版されたことは注(20)で述べたが、柳説の骨組だけを探っても《拜輪詩選》自序と《潮音》英文自序が同じ年にかかれたことになってしまう。二つの序の質的差は、その執筆時期に一定の時間の経過があつたことを示唆していると思われる。私は、八年九月初版時に《拜輪詩選》自序がかかれ、再版か三版のときに九年一〇月と記されているフレッチャー序が入り、《潮音》英文自序もやはり九年の再版時にかかれたが、柳の推測するようにフレッチャー序に紙幅を譲つたのだと考えたい。もっとも《拜輪詩選》再版は、何かの

都合で壬子（一九一二年）五月三日まで延期されたのだが。

- (40) 太炎先生に關する二、三の事 太炎先生のことと想い出される二、三の事 共に 且介亭雜文末編 所收。

(41) 墳 題記。

- (42) 山田慶兒 可能性としての中國革命。現代革命の思想 3 中國革命 筑摩書房一九七〇、に收録。

(43) 集外集拾遺 所收。

- (44) 大安版は、一・二・四・七・一三・一四各號を缺く。但しプラハ東洋研究所が第四號を所藏している。

(45) 「獸性の愛國」という言葉自體は、破惡聲論にみられる。中國人がインド・ポーランドを奴隸と罵倒する事（摩羅詩力説一章）等獸性の愛國と類似した話題もまた。周作人論文に含まれている。

- (46) 林洪亮（魯迅とミツケヴィチ）（文藝論叢第二輯）上海文藝出版社一九七八所收）は、新發見の魯迅（隨感錄）の文章を引用している。

「そのころ……世の中の愛國者の聲を聞きその國の事情を調べてみたいと切望していた。ポーランド、インド……これらに言及した中國人は多かつたが、私も非常に早くから注目していた。」この言葉は、破惡聲論の「古國の亡國の民は——中略——今やみな自覺を持つに至り心情を吐露して叫びをあげている。その聲は輝きに満ち精神は高揚して、強暴な彈壓や偽りの術による支配に負けぬようになってきた。」に對應するものである。しかし破惡聲論が發表されたのは、インド革命が論じられて已に久しい一九〇八年十二月のことである。

(47) 章太炎の革命思想と辛亥革命 現代中國 三七號。

- (48) 俱分進化論 五無論 四惑論 各 民報 七・一六・二二號等。

(49) 颶風 五號。

(50) Main Currents in Nineteenth Century Literature Noni &

Liveright, Inc. N. Y., London; William Heinemann Ltd. 1924.

- (51) (52) バイロン・文界之大魔王 明治三十五年九月再版 大學館。

(53) J. Wain 〔The Search for Identity〕 Byron A Collection of Critical Essays ed. by P. West, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J. 1963 に收録。

(54) 注(5)と同じ。

(55) 許壽裳 亡友魯迅印象記 人民文學出版社、一九五五。

(56) 一九一二年三月蕭公宛書簡。

(57) アクセルの城 土岐恒二譯、筑摩書房、一九七二。

(58) 新青年 第五卷（一九一八）、悼曼殊。

(59) 注(5)と同じ。

補注1 摩羅詩力説を收めた河南 第二、三兩期、獨應 論文章之意義暨其使命因及中國近來論文之失を收めた同第四期のグラビアーには、それぞれ蘇曼殊畫 洛陽白馬寺 關漢 天津橋驛鷓鴣圖 が印刷されている。

補注2 劉增杰氏の指摘によると、馮自由 革命逸史 に 河南 が十期まで出版されたと記されているとのことである。（漫話魯迅與河南 河南師大學報 社會科學版一九七九年五期）なお、上海復旦大學は同誌第一〜九期を藏している。